

裏切りの歴史 ／ 信頼の条件

——小林多喜二
『工場細胞』を中心に——

荒木優太

一、裏切りの歴史 浮ぶこと / 沈むこと

「少し行くと、氷水店があった。硝子のすだれが涼しい音をたて、揺れていた。小さい築山におもちゃの噴水が夢のように、水をはね上げていた。セメントで無器用に造った池の中に、金魚が二三匹赤い背を見せた。

おじさん、冷たいラムネ。あんたは？

氷水にする。

そ。おじさん、それから氷水一ツ」(『工場細胞』「中」第十三章)

小林多喜二の中編小説『工場細胞』は昭和五年四月から六月、『改造』に分載されて発表された。その中で物語の主軸となるのは、森本とお君という主人公とヒロインだ。「H・S工場」という近代的製罐工場での左翼運動に従事し共産党員にさえなる男と彼に魅せられるようにして運動の重要性を理解していく女。森本は氷水を飲み、お君はラムネを飲む。

氷水の氷は水に浮んでしまうけれど、対照的にラムネのガラス玉は浮ばず沈む(註一)。二つの飲み物は二人の将来を象徴している。最終的に特高に検挙されてしまう森本は『工場細胞』の続編となる第二部『オルグ』(『改造』昭六・五)で、監獄内で情報を漏洩した党の裏切り者として登場する。それはお君への愛情からくる振る舞いだと森本は説明する。そのような彼に、お君は軽薄さを感じ、絶望すると共に彼と手切れする。自身を反省して曰く「あたしは、何処か浮気なところがあるのだろうか。馬鹿な！ 若し、あたしが浮気ものなら、森本とズルになっていたかも知れないではないか。それに違いない」(『オルグ』「中」第七章)。氷水の氷が「浮」ぶように、森本には「浮」気があった。しかしお君はその浮力に引きずられなかった。決して浮ぶことのないラムネのガラス玉のように彼女は沈んで運動に徹底する。

しかしながら、浮ぶ勿れという禁止命令の起源をお君の個人的な性格に求めるべきではない。多喜二が『工場細胞』を執筆している際、彼は未だ正式な共産党員ではなく、伝聞情報を頼りに党の運動家の実態を描写したと考えられているが、少なくとも同時代的な左翼運動の動向は適確に把握していたと考えられる。というのも、そもそもその命令は非合法共産党の地下活動に顕著にみられる規範でもあったからだ。

共産党員が大量に検挙された三・一五事件以後の、昭和五(一九三〇)年前後において、日本共産党は非合法主義を徹底し、公権力に捕捉されない非公然の形で展開できる地下活動に力を注いでいった。そこに大衆との遊離の原因をみ、解党からの合法的党活動の必要を唱えた「労働者派」(水野成夫、浅野晃、門屋博、河合悦三、村尾薩男、是枝恭二など)の共産党員達は、他の党員から「解党派」と呼ばれ、裏切り者扱いをされることになった。「解党派」は浮ぶ勿れの命令を無視して公然な運動を目指してしまっている(註二)。

この点は『工場細胞』の本文でも言及されている。森本の直接の監督役であり、彼を共産党に勧誘した張本人である河田は次のように述べている。

「とにかく今になって云うのも変だが、「三・一五事件」で何故僕らがあの位もの要らない犠牲を払ったか、ということだ。それは、さっき云ったあの華々しい運動をやっていた先輩たちが、非合法運動なのに、今迄の癖がとれず、時々金魚のように水面へ身体をブク浮ばしていたところから来てるんだ。工場に根をもった、沈んだ仕事をしていなかったからだ。 実際、僕たちの仕事が、工場の中へ、中へと沈んで行って見えなくなってしまわなければならなかったのに、それを演壇の上にかけるぼって、諸君は！と がなってみせたり、ピラを持って街を走り回ることだと、勘ちがいをしてしまったのだ」(『工場細胞』「上」第五章)

再び「金魚」が登場する。というよりも、そもそも、氷水屋の池で浮ぶ「金魚」のイメージは既に、河田によって批判されていた訳である。つまり、壇上で衆目を集めたり、ピラをもって撒き配ること、即ち「時

時金魚のように水面へ身体をブク浮ばしていたところ」があった為に三・一五事件の悲劇は起こった。池に浮んでくる金魚は『オルグ』以降の森本の裏切りを予告していたといえる。浮かれ上がってなされる公然の活動は、公権力を過剰に挑発し、根こそぎの検挙を誘発させる。「浮かんだ労働組合を千回作っても、「三・一五」が同様に千回あれば、千回ともペチャンコなのだ」。それ故、浮ぶ勿れの命令、言い換えれば「沈んだ仕事」は徹底されねばならず、それに反する行動は裏切り行為に等しいのだ。

多喜二は書簡の中で、『工場細胞』のテキストの主題の一つに「スパイ(党員のうちのスパイ)」、つまり裏切りの問題を数え、「今迄の作品になかった」そのテーマに意欲を示していた(註三)。『オルグ』では、「居直り」のスパイ」と「はなッからのスパイ」(「上」第四章)と大別しているが、多喜二が念頭に置いているのは特に前者、スパイ=裏切り者だ。

この問題意識は歴史を知る者から事後的にみれば、皮肉な事態にみえる。何故なら、その問題を先行的に取り上げた多喜二自身が共産党内部に潜入していたスパイ、三船留吉に密告されたことをきっかけに、昭和八年二月二十日逮捕、そして拷問の後に殺害されてしまったからだ。勿論、スパイという敵でありつつ味方の振りをする両義的存在者への洞察が深ければ、その悲劇を回避できた訳ではないだろう。しかしながら、裏切り問題がテーマ化されたとされる『工場細胞』、そしてそれに続くテキスト群で、私見からみ限り多喜二は、『蟹工船』で資本主義と植民地の関係を理解したように、問題をつきつめることはなかったことは考えられていい。実際に、多喜二が入党した昭和六年時の非常時共産党と呼ばれる時期の共産党は、俗称スパイM(本名、飯塚盈延)が中央委員を務め、指揮権を独占していた、傀儡組織であった。つまり、スパイの問題は多喜二の予感以上に運動上の最大の急所であったのだ。

しかし、テキストの断片は、裏切り問題が決して個人の素朴な悪意や謀反心といった個人主義的テーマで全てを回収することはできないことを教えている。裏切りを可能にする為には、裏の構成、つまりは表/裏の分節が強化されていなければならないだろうが、その分節を根底で支えるのが、上記の浮ぶ/沈むという当時の二項対立的分節コードであることは明らかなだ。つまりは、歴史的制約のなかで裏切り問題は考え直されなければならない。そこからみえてくるのは、裏切りを誘発させるような史的機制の存在であり、それに対する考察は多喜二のやり残した仕事の補完作業に代えることができる筈だ。

二、非対称の情報環境

強調しておきたいことは、「沈む」ことを優位におく行動規範は何の普遍性もない時代制約的なものであったということだ。運動研究者である伊藤晃は、三・一五事件以後の「非合法主義は、大衆団体の自立性を軽視し、革命精神（つまりは共産党のスローガン）をおしつけるやり方」をとっていたとし、非合法運動が却って合法運動の障害となった例などを挙げつつ、当時の共産党の外延と裾野の狭さを指摘している（註四）。この傾向性は立花隆が強調していた、大衆から無支援だったインテリ中心の戦前共産党像に直結する（註五）。河田がいう「根」づきの作戦は歴史的にみれば失敗している。

しかし『工場細胞』の登場人物たちは皆、その点に気付くことなく、如何に「沈む」のか、換言すれば、如何に秘密を守り続けられるか、に執着し続ける。森本、河田等、運動家の集いである「会合」は「秘密にされなければならなかった」（「上」第五章）から、来訪時も帰宅時も必ず連れ立って歩くことは禁止されている。或いは河田は面識のない党中央部のオルガナイザー（組織者）と連絡を取るのに、慎重にも合言葉や暗号を用いている（「上」第七章）。組織、党、運動に関わること全てが秘密にされ、情報の漏洩は固く禁じられている。「表面などに「活発にも」「花々しく」も出すどころか、絶対に秘密にやって行くわけだ」（「上」第五章）。

しかし秘密への異様な執着は、勿論、運動家に有利に働くだけではない。秘密をもつことは秘密をもたれることの可能性とセットになって意識化される。『工場細胞』で描かれた鈴木という裏切り者の挿話群がその状況をよく示している。

鈴木は無産運動生活のために、「清貧」に暮すものの、或る時期から仲間への疑念を抱いてしまう。つまり、運動において仲間が遅れをとっているのではないか、運動資金の分配は適切に行なわれているのか。その疑心のきっかけを作ったのが特高との接触だ。特高はその疑いを活性化させるように、誘惑的に鈴木「の仲間」の情報を密告してくる。

「同志」というものゝ気持は、僕等からとても覗き知ることの出来ないほど、深い信頼の情ではないかと思うんだ。だが、君はそれに裏切られているのだ。それが分ったとき、僕は君に対して何んと云っていきか分からない、淋しい、暗い気持にされたのだ！」（『工場細胞』「上」第八章）

このような誘惑の言葉、そして金銭の授受を通じて、鈴木は特高のスパイとなっていく。最終的には森本や河田の情報を密告することで彼等の検挙を手助けしてしまう迄に至り、自身は（罪悪感に苛まれたのか）獄中で自殺する。

鈴木は党に対して秘密を抱く。しかし、その原因を単なる彼の意志の弱さにだけ求めることはできない。何故なら、特高の言葉が示唆しているように、彼の秘密はそもそも「同志」が先んじて秘密を隠しているのではないかという疑心によって引き起こされているからだ。秘密への意識は均衡を保つように秘密の意識を産み出していく。或いは、先取りした裏切りに返報するように裏切り行為がなされる。鈴木「の裏切り」は、飽くまで本人にとってみれば、受動的なもの、つまりは裏切られた可能性に触発されたものとして現象している。何故、このような現象が生じてしまうのか。

受動性を先取りしてしまうこと。問題となっているのは、情報の非対称性だ。何故なら、情報が対称的でないがために、片方の同志の知と行為はヴェールに包まれているように見えてしまい、実際に彼が裏切っていなかったとしても、非対称性が深読みを自然に誘発させるからだ。

実際、非合法共産党には情報の非対称性が日常茶飯に生じていたことは注目していい。松本清張は、特高警察への情報漏洩を恐れ、「中央部員でもお互いの住所を知っていることは、危険率が多いので、それを知らせないようにしている。それを知らずとするのはよくないこと」で、しかも「黨員間では上の命令が

ない限り連絡も勝手に決めることはできない。どんなに親しくても、だれがどこに住んでいるか、黨員間で知る者はな」かった戦前共産党の閉鎖性を指摘している（註六）。上意下達の構造は情報を共有化することを禁じ、結果、地域差や階級差や個人差の如何によって黨員のもつ情報のそれぞれはそれぞれがまったく異なった全体像の断片となる。

事実、昭和二年に入党した福永操は、「下部組織の者は、自分が連絡をとる直接上部の者が「実はどんな人間」であるかをまったく知ることができない。その人間の経歴はおろか、名前さえも知らない」と回想しているが（註七）、河田とオルガナイザーとの暗号的連絡は典型的にこの事態を示しているといえよう。昭和五年に入党を果たした宮内勇も又、「当時の私は末端の一黨員であったから、党中央部がなにびとによってどのように構成されているのか全く知るところはなかったし、また知ってはならなかった」と回想する（註八）。

鈴木は運動家としての「仲間」による承認や運動費の使用の公正性を疑っていた。しかしその疑心の真偽を確かめることは、非合法主義下の組織状況では容易ではない。何故なら、情報の全体像を担保する最終審級がそこにはどこにも具体化されておらず、彼らは仕方なしに自身と周辺の情報寄せ集め、継ぎ接ぎすることで全体の虚像を手に入れる。しかし、繰り返しになるが、それを正不正と断定する決定的な審級は存在せず、継ぎ接ぎのなかに特高の情報が紛れ込んでしまえば、党や同志の状況は歪んだ形で表象される。このような環境に囲まれて、芽生えた疑心を克服することは極めて困難だ。

中村三春は『工場細胞』『オルグ』での語りを「複数のストーリーラインが交錯し、異なる水準のエクリチュールを点綴して構成されたモンタージュ的」な特徴をもつものとして規定し、焦点人物と物語内容の脱中心化、ピラや新聞記事や歌の歌詞といった断片的テキストの挿入による、映画映像的な表現を読み込んでいる（註九）。しかし、多喜二の語りは、表現技法の問題というよりも、より素朴に、非合法主義下の地下活動をリアルに再現する必然的な表現手段として考えることができる。「沈んだ」世界に参加者すべてを一覧できるような鳥瞰的な視点は存在しない。その条件下で、客観的な把握を目指そうとすれば、必然的にそれは、個々人が間接的に獲得した経験、情報の断片群といった虫瞰的な視点の継ぎ接ぎ、中村の言葉を使えば「モンタージュ」によって、客観的超越的視点を再構成するしかない。

しかし、その努力にも関わらず、再構成されたその世界の客観性を担保する最終審級を参加者が獲得することはできない。事実、両テキストには（例えば、自殺する鈴木の心象、森本が獄中で党情報を密告する現場など）語られなかった空白部分が存在する。その欠如は、テキストの不備ではなく、地下運動に参加していた者のリアルな世界を表象していると考えられる。それに加えて読者は、語られなかった空白部分を断片化された情報を頼りに想像的に補填するしかない。このような行為は、運動参加者のそれに近く、テキストの語りは読者をも擬似的に非合法主義に巻き込むのだといえるだろう。

三、脱人格化との葛藤 人／運動

情報の非対称性が常態化した世界にあって、そこに投げ込まれている参加者は常時の緊張状態に曝される。鳥瞰的視点を欠き、全貌の把握できない非合法組織との連絡は、その行為自体が個人情報の一方向的な漏洩に等しい。勿論、それは「仲間」とのコミュニケーションだと言い換えられる。しかし、その「仲間」の内実とは、水平的な相互交流が日常的にない以上、その大部分が、面識なく、住所も名も知らない者の集合でしかない。非合法主義下の組織において、「同志」とは、「会合」で出合えるような生活圏内の少数の運動家と全国に広がっているだろうが見も知らぬ未知の無数の同志や容易に会うことのない中央委員に大きく乖離する。津田孝は『工場細胞』の戦いは「目にみえない闘争」とであると指摘しているが（註一〇）、「目にみえない」のは多くの同志も同様で、その不透明さ故に、同志への疑心が生じてくるのだ。

ここで、鈴木が元々、「人」か「運動」か、どちらを信じるのかという二者択一に悩んでいたことが思い返される。つまり、河田や森本といった個々の仲間に遅れをとっているのではないかという焦燥とそのような個々人に焦点化する問題構成の欺瞞とが葛藤するのだ。

「然し自分は一体「運動」を信じて、運動をしているのか、「人」を信じて運動をしているのか？ 河田や石川が自分にとって、どうであろうと、それが自分の運動に対する「気持」を一体どうにも変えようが無い筈ではないか。 又変えてはならないのだ。そうだ、それは分る。然し直ぐ次にくるこの「淋しさ」は何んだろう？ 彼はもう自分が道を踏み迷っていることを知っていた」（『工場細胞』「上」第八章）

このような「淋しさ」は非合法主義下の党組織に特有な心理現象であるように思われる。というのも、既に確認したように、非合法主義の秘密な地下活動（沈むこと）は党员の人格的特徴（名前、住所、経歴）を捨象し、その組織内の機能的働きだけに価値を見出す枠組みを作る。逆にいえば、その働きさえ代替できれば、その党员は必ずしも彼自身でなくても構わない。実際、「運動」はその参加者同士の面識や友情の有無に関係なく、駆動するし、 労働条件の是正といった目的を果たす為には 駆動せねばならない。だからこそ、非合法主義下の運動の担い手は、脱人格化されねばならないし、そう扱われることを拒否することは難しい。連帯の本質は日々出会う同志よりも、より広範な未知なる同志の方に求められるのだ。

ここに「淋しさ」発生 of 契機がある。ある人がその人である必然性は、非合法主義では重用されない。特に、自己証明の基礎的な身体部位「顔」についての『工場細胞』（特にベテラン党员の河田）の言及は特徴的だ。秘密の「会合」で、鈴木が窓を開けると、すぐに河田が「鈴木君、顔を出すと危いぞ」と注意する（「上」第五章）。或いは、河田が森本を重用するのは「君は大切な人間なんだ。絶対に警察に顔を知られてはならないんだからね」と顔の周知の度合いが焦点化される（「上」第六章）。要するに、「何時でも森本の「顔」のことを心配していた」のだ（「下」第十八章）。

個人を識別する際、日常的に参照される最も基礎的な裸出した身体部位は、個人と直接紐付けされているが故に、非合法主義運動の中では、逆に率先して隠すべきもの、確認されるべきではない対象として扱われる。そもそも、可能ならば「顔」は存在するべきではない。「運動」の都合からいえば、彼はのっぺらぼうになるべきでさえある。河田や森本、そして多喜二自身と同じく戦前共産党地下活動に従事していた戦後作家、埴谷雄高の文学的鍵語が「のっぺらぼう」であったことは偶然ではない（註一一）。

このようにして、運動のために運動をする者は、自身の脱人格化を受け入れねばならない。そこでは個人情報秘められ、運動上の機能のみによって評価され、場合によっては自身が他の同志に代替されることを許せねばならない。他「人」がどうであれ、この「運動」の命令は遵守されねばならない。ここに「淋しさ」が発生する。

しかし、鈴木は二者択一に際して、前者、つまり純粋な動機から見れば不純な「人」を信じることを選ん

でしまう。それは、お君への好意から覗える。お君や彼女の友達であるお芳が運動に参加するようになってから、「鈴木は最近馬鹿に積極的になった」と評価される(「中」第十五章)。それは鈴木がお君を愛し、彼女のことを「最後の藁」と思うようになったからだ。しかし、鈴木はお君と河田との関係を勘ぐり、「嫌になるな、君。お君と河田が変なんだぜ」と森本に愚痴る。こうして、「彼は最後のお君までも失ってしまった。何んのために、自分は「集会」であんなに一生懸命になったのだ！　こうなって彼は始めて自分の道が今度こそ本当に何処へ向いているかを、マザと感じ」るようになる(「中」第十六章)。

鈴木は「人」と「運動」の二者択一で、「人」、つまりお君を選び、彼女の為に、「淋しさ」を埋め合わせるかのようにして運動に参加する。しかし、動機の主軸となった当の「人」との関係に一度失敗してしまうと、運動に従事する必然性は当然なくなってしまう。そこで見出される「自分の道」とは、要するに諜報行為であり、これをきっかけに河田も森本も検挙されてしまい、お君は一人残される。同じことは『オルグ』でも繰り返される。検挙された森本はお君の元へ帰ろうと、地下活動の情報を告白する代わりに、河田に先んじて出所するが、お君はそれを「裏切りをさせるような愛なんて、ニセものです」と断ずる(「上」第五章)。「人」と「運動」の二者択一で、前者を選ぶ者の運動参加は不純で、裏切り行為に等しいのだ。勿論、この選択肢は浮かぶ／沈むの二項対立に対応している。

四、純粹主義の逆説 人間 / 機械

非合法主義は、その参加者に、一種の純粹主義的な規範を科す。つまり、単純に衆目を集めたいといった軽薄な欲望で「浮」んだ目立った運動をしてはならない、だとか、そもそも或る任意の人間の好意や評判を得るために運動に臨むべきではない、というような規範だ。そして、その規範から逸脱した者は裏切り者に認定される。

だが、そのような純粹主義の徹底化は逆説的な事態を参加者にもたらしたように見える。それを知るには、そもそも、『工場細胞』とはどんなテキストだったろうかということを考えてみればよい。注目すべきなのは、一見語義矛盾の印象すら与えるその題名である。島村輝は集団の基礎単位でありつつも一個の生命体のようにプロレタリア運動のすることのできる工場労働者を示す「工場細胞」の語彙がテキストと同時代の「モダン語辞典」などに登場している事例を引きながら、その語が革命家や運動家などに限定されず、広く一般大衆に認知されていっただろうことを推測した上で、その「対立項」的表象を分析している。「機械による収奪の強化が日常化している近代的な「工場」と、そのなかであって、生命体のように浸透し、増殖し、組織をつくりあげる「細胞」。このいわば相反する二つの表象を組み合わせて、「工場細胞」という言葉は成り立っている。〔中略〕「工場」のなかで、人間同士のつながり、ネットワークを作り上げることによって食い込んでいこうとする「細胞」のたたかいが、困難を極めることは予想に難くない。しかしそれはまさしく「機械」対「人間」という対立項をになっている以上、「細胞」という、いわば生命を担う基本的な単位の名を持つ組織（あるいは個々切り離された活動家）が、革命的な労働者に対して、その実効はともかく、希望と活力をともなう表象として作用したといえるのではないだろうか」（註一二）

「工場」と「細胞」、つまりは「機械」と「人間」の二項対立がテキスト全体を司るコードである。この見解には一定の説得力がある。実際、テキストの中では「機械」と「人間」のせめぎあいが重要な問題意識として描かれている。つまり、「働いている職工たちは、まるで縛りつけられている機械から一生懸命にもがいているように見え」（「上」第二章）そして「そこでは人間が機械を使うのではなくて、機械が何時でも人間をへばりつかせて」「ハンドルを握った労働者の何処から何処までが機械であり、何処から何処までが労働者か、それを見分けることは誰にも困難なことだった」（「中」第十四章）。作中ではこのような労働者のことが「人造人間」と綽名されている。

「誰が機械になりたいものか。労働者はみんな人間になりたがっているのだ」（「中」第十四章）という労働者の内心の声を代筆するこのテキストは、「人造人間」への異議申し立て、つまり「人間」と「機械」の境界線を強く引き直す必要性を読み手へのメッセージとして提示しているといえる。実際、作中でも示されているように、技術の発達に伴い、機械はオートメーション化（「自動」化）されていき、生身の労働者は解雇されるか機械の付属品として酷使される。そこに人間としての尊厳は認められない。マルクスが疎外の現象として問題視していた点だ。

人間と機械を峻別せよ、人間は機械ではないのだ。このような異議申し立てを原動力にして、作中の様々な左翼運動への動員が実現されていく訳だが、しかしながら、第二部『オルグ』では、この申し立ての貫徹は逆説的な結果をもたらしている。「人造人間」の対をなすように登場するのが、「ロボット」という比喩だ。

「この人は、まるで、「ロボット」みたいな人！ だとお君は思った。

お君は何かしら、がったりとした気崩れを覚えた。然し、一方では、プロレタリアの闘士と云うものは「ロボット」でなければならないのではないかと云う気もした」（『オルグ』「下」第十一章）

お君は石川という共産黨員と知り合い、二人は共に愛情を感じ始める。しかし、石川は「運動しているも

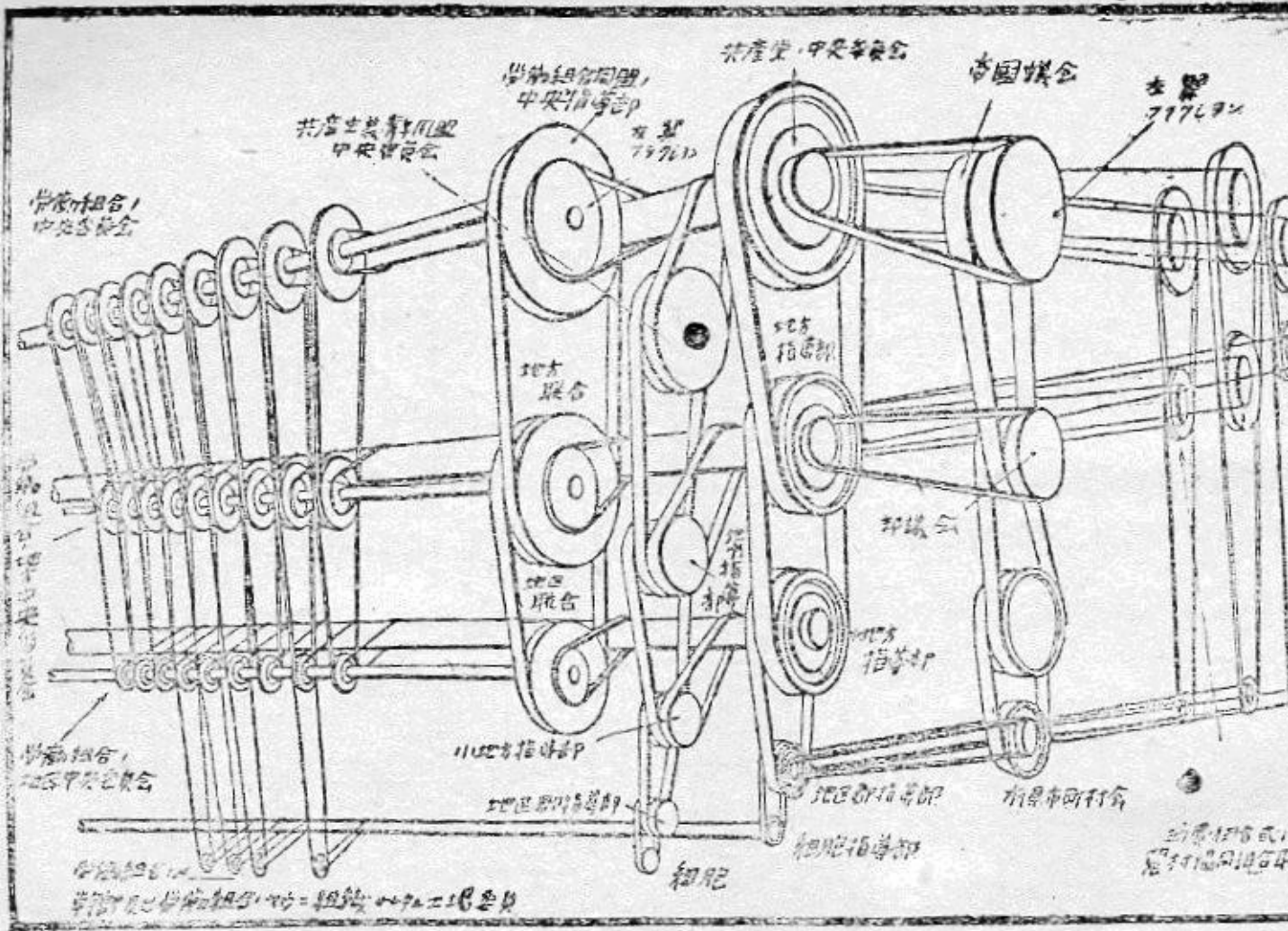
のに、この男と女のことぐらい、気をつけなけりゃならないことがないからな」といって男女の恋愛的、性的関係性を抑制しようとする。というのも、石川は自らの身が検挙されてしまえば十年は不自由になる身体であり、又実際に女性関係があったために捕まってしまった同志を知っていたからだ。その禁欲主義をお君は「ロボット」と呼称する。ここには、当時プロレタリア作家界隈で問題として焦点化されていた「愛情の問題」(註一三)が介入している訳だが、それ以上に比喻使用の決定的差異は注目に値する。

『工場細胞』から『オルグ』を通読していると、一つの逆説が生じているように感じられる。というのも、「人造人間」化する労働者(プロレタリアート)を救済する為に立ち上がった運動家その人自身は、機械化(「ロボット」化)の課題を負うことになるからだ。勿論、この逆説の発生は、「人」と「運動」の二者択一を科し、参加者に脱人格化を命令する純粹主義と無関係ではない。何故なら、「ロボット」化は、「人」への愛情ではなく「運動」の目的達成を選択する純粹主義の純粹な帰結であるからだ。

多喜二の作家的卓越性を擁護するノーマ・フィールドは「お君と石川の互いの想いと、運動の想いから生じる緊張感」を「個人対運動」の図式で解釈することは「短絡」であり、運動が人間の幸福に還元される以上、緊張を容易に解消してはいけないし、それをしなかった点に多喜二の卓越性があると指摘している(註一四)。しかしその対立はテキストの基本的コードが前提にしていることであり、それに則った読み方を「短絡」と退けることはできない。寧ろ、ここで問うべきなのは、多喜二の意図如何ではなく、その「緊張感」とは相対化を許さない論理的必然の産物、つまり運動に際して不可避な現象であったのかどうかということだ。そして勿論、この問いには「人」と「運動」の対立を前提させてしまう問題構成の史的機制、つまり非合法主義下の特殊な地下運動状況からの影響なしには考えられない、と前述の分析から応えることができる筈だ。

『工場細胞』を書く際の小林多喜二は参照できなかつただろうが、昭和六年九月に出版され、当時の共産党組織論に大きな影響を与えたピアトニツキーの『組織論』(プロレタリア書房)の中で描かれた、党とフラクション(「細胞」と同義)の関係図(下記の図参照)は機械化された各人員、各部署の連結が無駄なく表現され、「運動」に殉じる「ロボット」たちの行く末を予告している(註一五)。

(第14図) 党とそのフランクシヨンの関係



しかし、この図はそもそも『工場細胞』の最初で描かれていた苛酷な労働環境にある機械が機械に連動している「工場」の描写とよく似ていることに気がされる。

「職場の片隅に取付けてある十馬力の発動機は絶え間なく陰鬱な唸りをたてながら、眼に見えない程足場をゆすっていた。停電に備えるガソリン・エンジンがすぐ側に据えつけられている。そこは工場の心臓だった。そこから幹線動脈のように、調帯が職場の天井を渡っている主動軸の滑車にかゝっていた。そして、それがそこを基点として更にその機械に各々ちがった幅のベルトでつながっていた。そのまゝが人間の動脈網を思わせる」(『工場細胞』「上」第二章)

「発動機」= エンジンを中心に動く「滑車」の回転が「調帯」= 「ベルト」を介して別の「滑車」、そして「機械」と連動し、その運動全体が「人間の動脈網」の比喻で捉えられる。しかし、労働現場で駆動するこの工場組織体は、歴史的にみれば、そのまま労働環境改善を目指す共産党組織体の基本的性格に引き継がれていったのではないだろうか。言い換えれば、共産党という運動体は、機械の部品のように「工場」が労働者を酷使するのと同じく、党员に脱人格的な運動を要求しているのではないか。そこで「働いている職工たちは、まるで縛りつけられている機械から一生懸命にもがいているように見えた」とテキストは続けて伝えているが、そのもがきは最終的に「ロボット」として生きなければならない党员の定めを予告している。しかし、勿論それで問題は解決した訳ではない。というのも、当初目的としていた、「機械」に脅かされた「人間」救出は、「ロボット」によって実行され、そしてその機械人形は、「運動」よりも「人間」を選ぶ裏切り者の排除と同時に誕生するからだ。問題はスライドしただけだ。

人間と機械を峻別せよ、人間は機械ではないのだ、という異議申し立ては、こうして今度は もしその申し立てを貫徹したいのであるならば それを唱えていた張本人である筈の共産党組織体に投げかけられなければならないものとなる。純粹主義は二項対立を既存のものとして設定し、その前提の上で、片方に優位性を与える形で展開していくが、しかし、それが進行していくにつれてその手続き自体が絶対化され、対立的契機（二者択一的な審議機会）なしに存続していくことになる。その果てには、人間と機械を峻別せよ、と自動再生する「ロボット」が出現するだろう。多喜二は図らずも二項対立的コードに貫かれた物語が、そのコードを徹底しようとするほどに、二項対立図式が自壊し、効力を喪失してしまう逆説的な過程を描いてしまったのだ。

結論、信頼の条件

社会学者ゲオルク・ジンメルは秘密結社の社会学について論じながら、信頼の基本的特徴を次のように表現している。

「信頼は、実際の行動の基礎になるほどに十分に確実な将来の行動の仮説として、まさに仮説として人間についての知識と無知とのあいだの中間状態なのである。完全に知っている者は信頼する必要はないでだろうし、完全に知らない者は合理的にはけっして信頼することができない」(註一六)

信頼とはジンメルにいわせれば、知と無知の「中間状態」である。つまり、全てを知っている訳ではないけれど、全く何も知らない訳でもない、というような状態において初めて信頼の条件が整う。もし全てを知っているのなら、将来的な事の成り行きの必然を適確に把握することができ、ある任意の事態や人間をわざわざ信頼する必要はない。純粋に知に頼ればよい。或いは逆に全く何も知らないのであれば、信じる際の判断材料が決定的に不足し、そもそもの信じるか否かといった基礎的な問題意識自体が結実しない。だからこそ、信頼とは必然的なものではなく、偶有的なものをその対象とすることとなる。

ニクラス・ルーマンは、この「中間状態」を「複雑性の縮減」の観点から解釈した。将来を予見するために必要な情報が不足している際、主体は現時点で与えられた情報からそれ以上の情報を引き出すことで、予見を適確なものにしようと補完的に努める。将来の複数の偶有性(あかかもしれない、こうかもしれない)という高い「複雑性」に単純な主体が耐えることはできない。それ故、引き出された余分な情報を元に、「複雑性の縮減」が行なわれ、正確である(と主体が思える)将来予想を先取りできる。不確定な状況に曝される主体は、信頼の力を借りることによって、想定内した状況を迎え入れる準備ができる。しかし、勿論その将来予想が意図通りに実現するとは限らない。だから、「信頼は、相変わらず冒険なのである」とルーマンは指摘している(註一七)。

ジンメルとルーマンの信頼論は別の言葉でパラフレーズすることができる。つまり、信頼とは必然的に裏切りの潜在的な可能性と表裏の関係で存在せねばならない、ということだ。裏切られる可能性が全く存在しない場合には、そもそも信頼は条件不足に陥っており、予め知によって事の次第を予見的に先取りすることができる。期待をかけること(信頼すること)によって、初めて裏切りという問題が発生する。裏切り行為それ自体など存在しない。

このような知見は『工場細胞』世界で示されたような裏切りの環境を考える上でも有用だ。『工場細胞』のテーマの一つが裏切りの問題であるということは、裏返していえば『工場細胞』は一時代の特異な政治組織に強く求められた信頼の特別なモードを描写しているということでもあるからだ。例えば、鈴木の上野は同志の裏切りを先取りしてしまったが故に誘発されたものだった。そしてその先取りも、情報の非対称性が常態化してしまう情報環境の時代的設定と純粋主義的な規範の圧力とを共に考えてみれば、彼の意志の弱さだけに問題の所在を求めることは難しい。加えて、鋭い二項対立を要求する純粋主義の徹底化は、本末転倒にも、「人間」不在のまま「運動」を推進していくことになる。しかし、「人」を信じることを裏切りと認定するのであれば、「運動」の先に「人間」救済が成就されるのかは疑わしい。このような純粋主義の徹底は元々の目的を喪失してしまっているように見える。

信頼を裏切ったからこそ裏切り者たちは批判される。しかし、そもそも信頼は(機械論といった言葉に付与されているような)因果法則に支配されている完全な機械には必要のないものだ。そこには「中間状態」が認められず、原因結果の対応が将来のすべてを決定する力をもつ。だからこそ、「ロボット」たちは精緻になればなる程、裏切りの可能性を自他共に排除するに比例して、信頼の本質的な価値をも放擲しているといえる。「運動」だけを信頼し続ける一見強靱な運動家は、しかし、信頼を形骸化させてしまうのだ

う。信頼とは必ず「冒険」を伴うものであり、確実に無駄にならない信頼（確信）は信頼の名に値しない。

勿論、多喜二のテキストで描かれる党員の多くは、運動に対する私的葛藤と優柔不断を抱え、「ロボット」そのものとは言い難い側面をもっている（註一八）。しかしながら、彼等の行動規範が歴史的条件と無関係であるとはいえない。詰まる処、史的機制、即ち、非合法主義の地下活動とそれを指導する純粹主義の徹底化は、現実的に維持可能な信頼の条件を整えることに失敗している。史的機制は、「ロボット」を推奨し、他の者たちを「裏切り」として正に切り捨てることを要求している。けれども、そこで出現するロボット集団は、「人間」救出の本来の目的を喪失し、運動を自己目的化してしまうだろう。前提となってしまう「人」と「運動」を二項対立的に提示してしまう問題構成は決して自明のものではない筈だ。多喜二のテキストは裏切り者の姿を点描しつつ、それ以上に、その個々人の心理に限定されない、裏切り／信頼の歴史的条件を意図せず描いているのだ。

(註一) ラムネは嘉永六(一八五三)年、日本の浦賀に輸入されてきたといわれているが、当時はワインのようにコルクで栓をしていた。その後、一八六〇年代、イギリス人のハイラム・コッドが「コッド瓶」と呼ばれるガラス玉で栓をする形式を発明し、その著作権が切れた明治二一(一八八八)年に大阪の徳永玉吉が目をつけ、以降日本でもその形式が広がった。

(註二) 解党派批判は、労働者派と同じく合法主義の必要性を昭和五年に唱えた労働農民党委員長の大山郁夫を批判する形で、多喜二の後の新聞小説『安子』(『都新聞』昭六・八~十)第三、四章の中にも書き残されている。

(註三) 多喜二は、資本主義下におけるフォード化された近代工場の搾取構造、工場細胞の活動とその成果、に続けて、裏切りテーマの独自性を主張している。佐藤績宛書簡、昭五・一・三〇。

(註四) 伊藤晃『転向と天皇制』第三章第一節、勁草書房、平七・一〇。但し、「外延と裾野」という言い方は伊藤が参照している田中真人『一九三〇年代日本共産党史論』(三一書房、平六・六)が使用しているもの。

(註五) 立花隆『日本共産党の研究』第八章、講談社文庫、昭五八・五。

(註六) 松本清張「スパイMの謀略」、『週刊文春』、昭四一・四~八。

(註七) 福永操『あるおんな共産主義者の回想』第五章第二節、れんが書房新社、昭五七・一二。

(註八) 宮内勇『ある時代の手記』第二章、河出書房新社、昭和四八・九。

(註九) 中村三春「「オルグ」の恋愛と身体」/『「文学」としての小林多喜二』収、至文堂、平一八・九。

(註一〇) 津田孝『小林多喜二の世界』第三章第二節、新日本出版社、昭六〇・二。

(註一一) 例えば、埴谷の評論「存在と非在とのっぺらぼう」(『思想』昭三〇・七)を参照。そこで埴谷は、認識論的な枠組みに於ける、主体による客体側の捉えがたさ(無限性)を文学的な表現として「のっぺらぼう」と呼んでいる。深く掘り下げることにはしないが、このような捉えがたさは、眼の前の同志以上に、見も知らぬ未知の無数の同志を意識化せねばならない地下活動の体験と決して無関係ではないだろう。

(註一二) 島村輝『臨界の近代日本文学』序論、世織書房、平一一・五。

(註一三) 「愛情の問題」は、昭和六年、片岡鉄兵「愛情の問題」(『改造』一月)や徳永直「赤い恋」以上(『新潮』一月)などのプロレタリア作家が提出した、運動家の生活と性の葛藤に焦点化した問題である。詳しくは、島村輝「小林多喜二と「改造」 「工場細胞」から「地区の人々」まで」(紅野敏郎+日高昭二編『「改造」直筆原稿の研究』収、平一九・一〇)などを参照。

(註一四) ノーマ・フィールド『小林多喜二』第三部、岩波新書、平二一・一。

(註一五) この図は、伊藤晃(前掲、第三章第二節)や立花隆(前掲、第三章)なども当時の共産党組織形態を示すために使用している。

(註一六) ゲオルク・ジンメル『社会学』(上巻)居安正訳、第五章、白水社、平六・三。

(註一七) ニクラス・ルーマン『信頼』大庭健+正村俊之訳、第四章、勁草書房、平二・一二。

(註一八) 運動「ロボット」として、「政治と文学」の文脈で批判されてきた『党生活者』の「私」にさえ、近年では、多喜二自身の素朴な政治主義を読み取る手法に疑問が呈されている。島村輝「『党生活者』論序説 「政治」と「文学」の交点」(『「文学」としての小林多喜二』収)やノーマ・フィールド「女性、軍需産業、そして《私》 「党生活者」はなにを訴えてきたのだろうか」(山口俊雄編『日本近代文学と戦争』収、三弥井書店、平二四・三)などを参照。

(本文の引用は『小林多喜二全集』(新日本出版社)を使用した。但し、文中の傍点は下線に置き換えた。)
(2012.8.1)

裏切りの歴史 / 信頼の条件 小林多喜二 『工場細胞』を中心に
<http://p.booklog.jp/book/54416>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/54416>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/54416>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ